日本の宗教

日本の原始社会は農耕社会であった。

人々は自然の力の前にほとんど無力だったので、生産を支配する太陽、大地、水を始め、月、山、森林、等にカミがいると想像した。

ここに原始神道が成立した。人々は目に見えず、何をするかわからないカミを不気味な存在として畏れ、敬った。

そしてカミが自分達を守ってくれるように、又怒って災いをもたらざないように、かみをまつり、物を捧げた。

この習慣は今なお色々な形で続いていると言えよう。

「古事記」や「日本書紀」などの文献を見ると、これらの神神が当時の人々の心の中で、いかに生き生きと生きていたかが知られる。

万の神の中でも日の神、天照大神は国の統治者として描かれ、これが皇室の祖先と言い伝えられている。

他方、インドに起こった仏教は、中国、朝鮮を経由して、六世紀半ば頃に日本に伝えられた。

当時の人々は仏教の難しい教えを理解し得たわけではなく、美しい仏像を拝むことによって、現世の幸福を得、病気や災いから逃れようとして、この大陸の新しい宗教を受け入れたらしい。

この限りにおいて、仏教の受容は比較的表面的・感覚的であった。

しかし、そのためにかえって日本古来の信仰との間に大きな対立も起こらず、徐々に民衆の間に浸透して行ったものと思われる。

その後、護国思想を旗印にかかげるようになった仏教は国家(皇室)によって保護され、国家宗教をも言うべき地位を獲得して、大は国家の平和から、小は個人の治病や安産の祈祷まで、すべて僧侶の手で行われるようになった。

仏教にはもともと宗派というようなものは存在しなかったが、次第に特定の教理を掲げた独立の宗派が誕生した。

最近、西洋でも関心が高まって来ている禅宗も様々な宗派の一つである。

禅はヨーガの実践を通して、即ち落ち着いた姿勢で、呼吸を統制し、精神を統一することによって、真理に到達することを目指すものである。

浄土宗は阿弥陀如来を信じ、念仏を唱えることによって極楽に往生することを説く教えである。

浄土とは「仏の住むきよらかな国」のことです。

この教えは十世紀末頃から政治が乱れ、生活も不安定になったことが、奇しくも仏教の末法思想を裏付けることになり、人々の精神不安定を救うものとして盛んになった。

寛容を宗とする仏教は、日本固有の神道と融和して、今日に至るまで日本人の信仰の基礎を成している。

キリスト教は一五四九年にフランスコ・ザビエルが鹿児島に来た布教したのが始めで、熱心な布教と慈善事業などによって人々の心をとらえ、急速に広まった。

しかし、「人間は神の前に皆平等である」とするキリスト教の教えが、主君への絶対服従を説く封建道徳と相反することから、十七世紀に入ると同時に徳川幕府によって禁止され、キリスト教徒達は厳しい迫害を受けた。

キリスト教の復興は明治維新後の欧米諸国との接触を待たなければならなかった。

現在の日本では憲法によって信教の自由が認められ、ある特定の宗教を国家が保護したり、禁止したりすることは出来なくなった。

近代化された日本にも日本古来の神道や仏教は日本人の生活に深く根差した生き続けている。

そして、多くの日本人は神と仏とを同列に考え、神道と仏教のどちらの宗教儀礼にも参加している。

例えば、新年えを祝ったり新策の建物の安全を祈ったり、結婚・誕生のお祝い事には神道が用いられる。

これに対して仏教の方は、葬式やお盆・お彼岸の墓参など、死んだ人の霊を慰める行事と結び付いていると言えよう。

しかしこれも、本来日本人の間に行われていた習慣が仏教と結び付いて、一層形式を整えたものだという見方もある。

この他、儒教は忠・考の思想を中心に日本人の道徳観に大きな影響を与えている。

このように、日本人(にほんじん)の宗教(しゅうきょう)は様々(さまざま)な宗教(しゅうきょう)が適宜(てきぎ)混(ま)ざり合(あ)い、独特(どくとく)の宗教(しゅうきょう)を形成(けいせい)しているのである。